

(資料7)

子育て支援サービス活用関係資料

- 世田谷区における子育てセーフティネットの取組
- つどいの広場などの支援者等を対象とした研修について
- 地域子育て支援センターの研修

世田谷区における子育てセーフティネットの取組

- 東京都世田谷区では、区内に民間、関係機関等も含めた子育てに関する様々な相談事業があり、それぞれに機能を発揮してきているが、区民からは、どの窓口で相談すればよいのかわからず、的確な支援が得られない状況も存在。

【基本的認識】

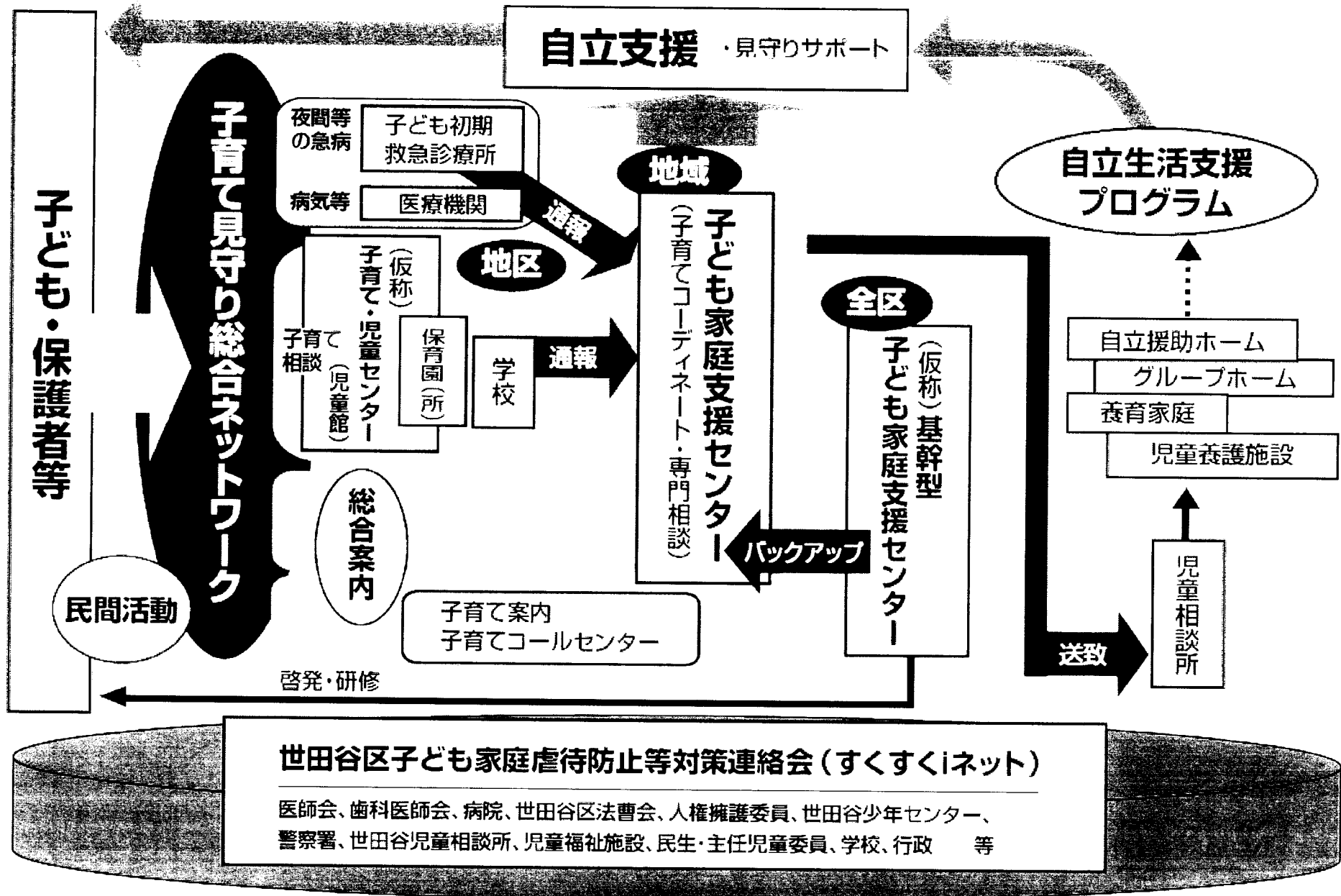
- ・ 子育てにあたっては、様々な緊急事態に直面するため、家庭・地域・行政が連携して的確な対応が必要。
- ・ 地域で「見張り合う」のではなく、「見守り合う」子育ての展開が求められている。

《世田谷区では、こうした状況や児童虐待防止法及び児童福祉法の改正を踏まえた対応が必要との認識に立ち、以下の取組を展開》

地域全体の家庭を予防の対象とし、区民、関係機関との密接な連携を図り、子育てに関する総合的な相談、解決のネットワーク（子育て見守り総合ネットワーク）づくりを推進

これらにより、子育て相談、虐待予防、子どもの初期救急医療などの各機能が、協働体制をとれるよう環境を整備。さらに、これらの機能のとりまとめとして、子育てコールセンターの実現に努力。

子育てセーフティネットイメージ図



(参考)市町村における子育て支援セーフティネットの構築

地域における子どもをめぐる現状

保健サイドの主なアプローチ

※平成15年度

- 新生児訪問(生後28日以内など)【任意】
—— カバー率 19.6%(未訪問 901,728人)
- 乳児健康診査(4か月児)【任意】
—— カバー率 94.0%(未受診 66,881人)
- 1歳6か月～2歳未満児健康診査【義務】
—— カバー率 91.9%(未受診 95,311人)
- 3歳～4歳未満児健康診査【義務】
—— カバー率 88.5%(未受診 138,601人)

福祉サイドの主なアプローチ

※平成16年度

- つどいの広場・地域子育て支援センター
—— 2,954か所設置(全国の中学校区の約3割)
- 育児支援家庭訪問事業
—— 96市町村で実施(全国の市町村の約3.4%)

児童委員・主任児童委員〔226,927人
(うち主任 20,777人):平成16年12月1日現在〕の状況

- 委員一人あたりの割当子ども数 ※平成13年度
—— 108.6人(主任 1,078.0人)
→ このうち、委員担当区域で顔と名前が一致する子ども数
—— 平均13.0人(主任 平均38.6人)

具体的実施方策

(1)「子ども・子育て見守り推進事業」(仮称)の全国展開

(事業内容)

- ① 乳幼児健診の場に、児童委員・主任児童委員が出向き、健診の順番待ちをしている親に声かけを行い、子育てに不安や悩みなどないか状況を確認するとともに、連絡先などを記したカードなどを配布し、自らをPRする。
- ② 乳幼児等健診未受診児には、市町村から文書又は電話で受診をさらに促すとともに、状況確認を行い、連絡が取れない親などに対しては家庭訪問又は電話等で状況把握を行う。
- ③ 家庭訪問等は、保健師が行うほか、児童委員・主任児童委員又は子育て応援隊に認定された者(一定の講習を受講後認定証の発行を受けた者)を訪問員に委嘱して実施し、結果を早急に市町村に報告。保健師は家庭の状況等を判断して必要な支援を行う。
(訪問員には、守秘義務を課す)
- ④ また、児童委員・主任児童委員又は子育て応援隊は、子育てサークルやつどいの広場などに出向き、子育て中の親との交流・相談や各種子育て支援活動への参加を通じて、各家庭の支援ニーズを的確に把握し、必要に応じて子育て支援事業・機関の紹介、あっせんなどを行う。
- ⑤ ②～④の状況把握の結果、虐待のおそれがあると判断された場合には、要保護児童対策地域協議会(虐待防止ネットワーク)につなぎ、関係機関の連携のもと継続的な支援を行う。

地域の子育て人材資源を活用(母子保健推進員、子育てサポーター、潜在保健師・潜在保育士 など)

(2)「児童虐待防止推進月間」を活用した啓発キャンペーンの実施

- 毎年11月の「児童虐待防止推進月間」を活用し、この期間中、「子ども・子育て見守り全国キャンペーン」(仮称)を全国的に展開するため、地方自治体や児童虐待に関係する省庁及び民間団体からなる「児童虐待防止対策協議会」に子どもの虐待防止等に資する取組を全国一斉に実施するよう働きかけ、様々な角度から子育て家庭を支援する総合的な体制を構築する。

つどいの広場などの支援者等を対象とした研修について

- つどいの広場の支援者等を対象に、平成14年度から以下のとおりセミナーを開催。
- 平成16年度からは、全国的なネットワークの形成と情報交換を目的として、つどいの広場の実践者や子育て支援団体等で構成される「つどいの広場全国連絡協議会」(平成16年4月17日設立)が中心となり、セミナーを開催し、広場関係者をはじめ、地域子育て支援センター、子育てサロンや行政関係者など、地域において子育て支援に携わる者が集まり、情報の共有、課題の顕在化など、活発な意見交換等を行っているところ。

研修会内容

	全国つどいの広場事業実践交流セミナー	つどいの広場事業研修セミナー 【主催：財団法人こども未来財団 共催：つどいの広場全国連絡協議会】
十四年度	【第1回 主催：横浜市】 ・基調講演、行政説明、活動報告、パネルディスカッション ・分科会(1～5) 主な内容: スタッフ、ボランティアの広場での相談・援助のあり方、専門機関との連携方法について など	
十五年度	【第2回 主催：熊本県】 ・基調講演、シンポジウム、行政説明 ・分科会(1～6) 主な内容: 広場での親子への関わり方について など	
十六年度	【第3回 主催：香川県 共催：つどいの広場全国連絡協議会】 ・記念講演、シンポジウム、行政説明 ・分科会(1～5) 主な内容: 対人援助の基本的な技術について など	【第1回：東京都、第2回：大阪府】 ・講演、事例発表、行政説明、ミニシンポジウム ※分科会開催なし
十七年度	【第4回 主催：山形県 共催：つどいの広場全国連絡協議会】 ・基調講演、パネルディスカッション、行政説明 ・分科会(1～5) 主な内容: 虐待や障がいなどリスクの高い子育てに対する“ひろば”での対応、専門機関との連携のあり方について など	【第3回：倉敷市】 ・プレゼンテーション、行政説明、ワークショップ ・分科会(1～4) 主な内容: 親の自立や子どもの育ちを支えるためのスタッフのあり方について など 【第4回：名古屋市 第5回：札幌市 第6回：金沢市 第7回：柳川市】

※分科会のテーマとしては上記以外に、「広場を始めるために」「広場でのプログラムのあり方」「行政・地域との協働」「広場の安定的な運営」等

平成17年度 地域子育て支援センター担当者研修会 A型

— 保育ソーシャルワーク研修会 —

1. 目 的

保育所が地域子育て支援センターとしての機能を果たすために、保育所の主任保育士等を対象として、育児相談・指導等を行う上で必要な知識・技術の研修を行います。特に今回のA型はソーシャルワークとしての子育て支援を深めて研修し、資質の向上を図ることを目的とします。

2. 主 催

厚生労働省

社会福祉法人 日本保育協会

3. 対 象

(1)地域子育て支援センター事業を実施又は実施を予定している保育所の保育士等とします。

(2)育児相談を実施又は実施を予定している保育所の保育士等とします。

4. 人 員

各都道府県・指定都市・中核市別に6名程度とします。

5. 期日び場所

次のとおり実施します。日程表は、別項のとおりです。

〈期 日〉平成17年8月2日(火)・3日(水)・4日(木)・5日(金)

〈場 所〉新横浜プリンスホテル

〒222-8533 神奈川県横浜市港北区新横浜3-4 電話・045(471)1111番

〈宿 舎〉同 上

研修会場までの交通案内＝電車／東海道新幹線・JR横浜線・市営地下鉄(1番出口利用)の新横浜駅に隣接、徒歩1分。車／東名高速道路横浜青葉I.C.から12km(平常時約25分)。第三京浜道路港北I.C.から3km(平常時約5分)。羽田空港から直行バス(平常時約40分)。

6. 研修内容

主な研修内容は、次のとおりです。

研修科目	研修事項	研修のねらい	実施方法及び時間	講師名
1. 保育の動向と課題	保育行政の現状と展望	保育行政の現状と課題について必要な知識を深め、保育所の将来を展望する。	講義 1時間	厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課
2. 子育て支援の意義	(1)子育て環境の変化と育児支援の必要性 (2)保育におけるソーシャルワーク	地域における子育て支援の意義について理解するとともにそのための保育所及び保育士の機能、役割について学ぶ。	講義 1時間30分	昭和女子大学 教授 秋山智久
3. 子どもの権利	子どもの人権と子育て	子どもの虐待防止と子どもの育ちを見守ることの大切さを学ぶ。	講義 1時間	厚生労働省家庭福祉課児童福祉専門官 太田和男
4. 就学前の保育施策の協働	多様化する地域子育て支援サービス供給主体の関係を考える	近年、保育士の専門性として保育ソーシャルワークが求められている。特にその中でも重視される関係者間の連携のあり方に焦点をあてながら研究討議する。	シンポジウム 3時間30分	コーディネーター兼メンバー① 大阪市立大学教授 山縣文治 メンバー② 川崎市立蟹ヶ谷保育園園長 神尾南枝 メンバー③ あけぼの幼稚園園長 安家周一 メンバー④ NPOひこうせん 赤迫康代 メンバー⑤ 和泉愛児園園長 広瀬集一
5. 地域子育て支援センター事業の実践事例研究	(1)実践事例発表 (2)家庭・地域社会との連携	特色ある実践発表を聴き学ぶ。現場実践事例にもとづき、実際に即して研究討議する。	講義・演習 3時間	木更津社会館保育園園長 宮崎栄樹
6. 地域社会との交流プログラムの開発	地域子育て支援センターの新しいプログラムとしての地域社会との交流	地域社会との交流の一環として保育園児と高齢者が一緒に交わることができるプログラムの開発。	講義・演習 3時間	渕野辺保育園園長 松岡俊彦
7. 家族援助の意義と応用	家族援助論、援助技術論を踏まえて子育て相談の方法と実際を学ぶ	保育所における家族援助としての子育て相談の進め方について認識を深める。	講義・演習 3時間	武庫川女子大学助教授 倉石哲也
8. 子育て相談の事例研究	電話・面接相談のロール・プレイング及び事例研究	子育て相談の原理と応用 子育て相談の事例研究 演習	講義・演習 3時間	専修大学教授 よしだひろみち 吉田弘道

平成17年度 地域子育て支援センター担当者研修会B型

－ 厚生労働省・日本保育協会主催 －

＜研修内容＞

研修科目	研修事項	実施方法及び時間	講師名
1. 保育の動向と課題	保育行政の現状と展望	講義 1時間	厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課
2. 子育て支援の意義と保育所の役割	(1) 子育て環境の変化と育児支援の必要性 (2) 地域福祉の拠点としての保育所	講義 2時間	淑徳大学 教授 柏女 霊峰
3. 子どもの権利	子どもの人権と子育て	講義 1時間	厚生労働省雇用均等・児童家庭局 総務課 児童福祉専門官 太田 和男
4. 地域子育て支援センター事業をどう進めるか	(1) 子育てソーシャルワーカーの機能と役割 (2) 地域子育て支援の理論と実践	講義・演習 3時間30分	昭和女子大学大学院 教授 秋山 智久
5. 地域子育て支援センター事業の実践事例研究	(1) 実践事例発表 (2) 地域子育て支援の実践事例研究 (3) グループ討議	発表・演習 3時間	東京家政大学教授 新澤 誠治
6. 子育てサークルの援助方法	サークル活動の援助方法の実際 〈音楽〉〈体育〉〈造形〉〈プレイ〉 〈AV（映像遊び）〉	講義・実技 2時間	こどもの城音楽・ 体育・造形・プレイ・AV各事業部
7. 子育て支援のプログラム	地域子育て支援センターの事業内容のプログラム作成	講義・演習 3時間	聖徳大学 助教授 神谷 明宏
8. 家族援助の意義と応用	家族援助論、援助技術論を踏まえて子育て相談の方法と実際を学ぶ	講義・演習 3時間	上智大学 教授 網野 武博

☆目的

保育所が地域の子育て支援センターとしての機能を果たすために、主任保育士等を対象とし、乳幼児の発達と健康・安全、子どもの権利、子育て支援の理論と実践を考えます。サークルの持ち方、支援センターのプログラム方法さらには育児相談の原理と実際の研修を行います。特に今回のB型の特色はサークル活動の実践（実技指導）を深めて研修し、資質の向上を図ることを目的とします。

☆対象

- (1) 地域子育て支援センターを実施、又は実施を予定している保育所の保育士等
- (2) 育児相談を実施、又は実施を予定している保育所の保育士等及び幼稚園関係者

☆期日及び場所

〈期 日〉平成17年12月13日(火)・14日(水)・15日(木)・16日(金)

〈場 所〉サンシャインシティプリンスホテル（会場・宿舎とも）

〒171-8440 東京都豊島区東池袋3-1-5 電話・03-3988-1111番

8. 熊本県：熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会

熊本県では、平成 5 年度に初めて地域子育て支援センター（以下、「支援センター」）を初めて開設した。平成 13 年には「くまもと子ども未来プラン」を策定し、県下中学校区内に 1 支援センターを目標に、積極的な取り組みを実施してきた。

平成 16 年 4 月現在、県内 79 市町村の内 55 市町村、県内保育所数 601 所（公営 218 所、民営 383 所）中、保育所の併設ではない支援センターも含め、74 か所の支援センターが開設されている。

郡市別地域子育て支援センター設置実績数、設置主体、種別

郡市	人口	実施カ所数 ※()連絡協議会 加盟カ所数	設置主体		種別	
			公営	民営	従来型	小規模
熊本市	670,003	3 (3)	1	2	3	0
八代市	104,728	4 (4)	0	4	4	0
人吉市	38,356	1 (1)	0	1	1	0
荒尾市	56,780	1 (1)	0	1	1	0
玉名市	45,377	1 (1)	0	1	1	0
本渡市	40,889	2 (0)	0	2	0	2
山鹿市	32,474	1 (1)	0	1	1	0
菊池市	27,055	2 (1)	0	2	0	2
宇土市	38,178	2 (2)	0	2	0	2
宇土郡	19,496	2 (2)	0	2	0	2
下益城郡	83,970	10 (8)	1	9	5	5
玉名郡	73,963	6 (5)	3	3	3	3
鹿本郡	57,271	6 (6)	4	2	5	1
菊池郡	134,153	11 (6)	4	7	2	9
阿蘇郡	75,356	6 (0)	6	0	2	4
上益城郡	85,809	3 (2)	1	2	2	1
八代郡	46,994	4 (4)	2	2	3	1
芦北郡	27,264	1 (1)	1	0	0	1
球磨郡	64,552	5 (3)	0	5	1	4
天草郡	84,741	3 (5)	0	3	2	1
合計		74 (57)	23	51	36	38

連絡協議会設立のきっかけ・経緯

平成 9 年の 1 年間を準備期間とし、平成 10 年に発足された熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会は、自主的に設立された。当時、相談事業の具体的なノウハウがなかったため、相談者への接し方や相談者が求める対応について悩みがあった。そこで、他の

支援センターでの事業方法についての情報交換、相談事例の共有等を通じて各支援センターが効果的な相談事業を行うことができるよう、定期的な活動の場を設けた。主な活動は、研修・研究の二本柱である。

連絡協議会独自の活動内容

◇カウンセリング研修会の実施

平成14年、本会は創立5周年を迎えたが、その5年間の活動の牽引力となったのは、杉田峰康先生（福岡県立大学名誉教授）によるカウンセリング研修の継続的实施である。職員のカウンセリング能力の向上は重要な課題であり、相談者の話を聞くだけでなく、相談者の不安原因を上手く聞き出すことができるか、その後で不安を解消するためにどのようにしたらよいのかなど、実際に相談事業を実施していく中で、カウンセリング研修の必要性がきわめて重要である。

このカウンセリング研修は、毎年4回程度開催されている。

◇ 調査研究事業の実施

(1) 実践事例研究会（平成13年～）

隔月に1回、各支援センターにおいて実際にあった育児相談や親子支援の事例を持ち寄って検討している。支援の経過や方法に検討を加えていくことで、適切な支援の方法を探っている。

(2) 子育てネット事業（平成13年～）

メールのやりとりにより県下の支援センターからの情報を収集し、熊本市子育てネットホームページ <http://www3.ocn.ne.jp/~knet/> に記載、情報発信している。

県事業「子育て支援コーディネーター養成講座」の実施

平成15年度からは、カウンセリング研修会も一定の受講者数が増え、実践事例研究会も受講者を増やし成果を上げてきたことに鑑み、県が主体となり、連絡協議会に事業企画から運営までを委託する「子育て支援コーディネーター養成講座」が始まった。

本事業の目的は、「市町村において、子どもと家庭を取り巻く環境を総合的に理解し、家庭全体を視野に入れたケースマネジメント、利用援助及び情報提供等を行う人材の育成を図ること」とされている。

対象者は、支援センターの保育士のみならず、地域の保健士や主任児童委員などである。それまで交流のなかった職種の者が同じ研修に参加することで、それぞれの立場からのノ

ウハウや知識の情報交換など行われ、ネットワークとしてつながる機会となった。

この事業に対する平成15年度の県の委託費は73万円で、平成16年度は99万円となっている。

年5回行われ、全課程を修了した者には、県知事名の終了証書が交付される。

熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会における平成15年度の事業

実施	事業内容
4月	公開講演 テーマ『今子どもたちに何が起きているのか?』ーディスコミュニケーションの文化の中でー 講師 野田正彰氏(京都女子大学社会学部教授)
5月	第1回実践事例研究会 ビデオ視聴/子どもの発達について学ぶ・『事例集』検討 第1回子育てコーディネーター養成講座(定員40名)
6月	第1回初級カウンセリング研修会 テーマ『初心者のためのカウンセリング入門』ー今なぜカウンセリングが必要か? 講師 杉田峰康氏(福岡県立大学名誉教授)
7月	第1回カウンセリング研修会 テーマ「ストレス社会と保育者」ー自己理解を高めようー 講師 杉田峰康氏(福岡県立大学名誉教授)
8月	第2回実践事例研究会 事例についての検討と考察 第2回子育てコーディネーター養成講座 拡大運営委員研修 テーマ『保育界の動向と子育て支援センター事業』 講師 山縣文治氏(大阪市立大学教授)
9月	第3回子育てコーディネーター養成講座 実務担当者研修 テーマ『ともに語ろう 私の子育て支援』ー子育て支援の現状と課題ー ワークショップ1.『地域の特性を活かした子育て支援とは?』 実践報告 栖本町子育て支援センター ワークショップ2.『地域(諸機関)と連携した子育て支援とは?』 実践報告 山鹿市子育て支援センター ワークショップ3.『子育て支援センターに求められる情報発信とは?』 実践報告 こじかクラブ
10月	第3回実践事例研究会 事例についての検討と考察
11月	第4回子育てコーディネーター養成講座 第5回子育てコーディネーター養成講座 第2回初級カウンセリング研修 テーマ『親子の絆と心の発達』ー性格タイプを学ぶー 講師 杉田峰康氏(福岡県立大学名誉教授)
1月	第4回実践事例研修会 事例についての検討と考察 第5回実践事例研究会 事例についての検討と考察
2月	第2回カウンセリング研修 講師 杉田峰康氏(福岡県立大学名誉教授) 第6回実践事例研究会 ケーススタディ研修会

連絡協議会の運営経費について

県の委託事業である「子育て支援コーディネーター養成講座」を除き、財政的には会員からの会費のみで運営している。1センターの年間会費は4万円（従来型・小規模型に関係なく一律）で、その会費のほとんどは研修経費に充てられている。

活動成果

利用者による支援センターの評価は、スタッフの評価でもあり、この点において、カウンセリング研修をはじめとする連絡協議会の活動は、スタッフの資質の向上に多大な貢献をしてきた。

研修参加者からは、「ふとした言葉を敏感に感じ取れるようになった」、「個々の支援センターの問題ではなく、地域全体の統一性を見だし、共通理解のうえで支援できるようになった」など、個々の質の向上に加え、地域全体の支援体制の向上にもつながっている。

今後の課題

NPO、民間企業、集いの広場事業など、子育て支援の、場・種類、ともに多様化してきている。また、近年の相談内容には、虐待の一步手前と思われるケースも目立ってきている。その中で、保育所が運営する支援センターには、どのような役割が求められているのか。子育て支援を地域全体の関係性という視点で捉え、課題を探し、研究・実践を深めていく必要がある。

〈今後の課題〉

1. 支援センター間の格差の是正（全体レベルの質の向上）
2. 保育園の専門性を活かした子育て支援の確立
3. 事例研究の積み重ね
4. インターネットによる情報発信の充実
5. 児童相談所、保健所など地域の社会資源との連携

子育て支援センター名(A市子育て支援センター)

タイトル 時間つぶしの子育てから、楽しむ子育てへ

<p>援助対象者と家族構成図</p> <p>祖父母(近所) 祖父母(県内)</p> <p>父 母 B さん</p> <p>30代前半 20代後半</p> <p>会社員</p> <p>Aちゃん 0歳3ヶ月</p> <p>*住：アパート</p>	<p>援助のねらいと目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 母親の気持ちを受けとめる。 ・ 話を聴きながら、母親自身が問題解決をし、育児の自信へとつながっていく様な関わりを配慮する。 <p>事例の概要</p> <p>広場や集い等の活動に、毎回のように参加する。母親は育児の不安や迷いをよく話す。「これは、どうした方がいい？」という質問が目立つ。子どもとの関わり方に自信がない。夜泣きがひどく、寝不足で疲れている。独身の時の交通事故の後遺症で、腕や肩が重たくなる日があり、時々、一時保育を利用する。子どもは、活動も広がり、活発に遊ぶ。母親は「朝が来ると、早く夜の寝る時間になるのが待ち遠しく、とにかく早く幼稚園に入る年齢になるのを心待ちにしている、毎日が時間つぶし」と言う。子どもが夜泣きをしなくなり、2歳をすぎ「子どもっておもしろい」と口にするようになる。</p>
<p>利用した制度、サービス及び他機関との連携の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動の広場 ・ 親子のつどい ・ 電話相談 ・ 一時保育 <p>市役所 → 出生名簿 → 子育て支援センター</p> <p>子育て支援センター ↔ 活動へ参加 ↔ Bさん家庭</p> <p>子育て支援センター → 通信 (毎月1回 *原稿依頼) → Bさん家庭</p>	

<p>討議内容や考察など</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ アパート住まいのため泣くのが怖く、ドライブして寝かせる。 “ドライブをしないと寝ない”という思い込みが強いのでは？ ◎ 気持ち(本音)が出せるように話しをきいて受け止め、信頼関係を築いていきながら、具体的な接し方(あやし方や関わり方)の実施、援助を繰返し行ない、ながい目で応援していく。 ◎ ドライブをやめ、寝る環境を作り、習慣付けていく。(生活リズムの見直し) ◎ 親子の関係がとれない時、逃れようとする母親。そんな時、支援センターが関わることで、子どもとの関係が築かれていく。 ◎ “夜泣き”を家族で乗り越えたことで絆が深まり、その体験をバネに、他のお母さん方にアドバイスとしていかされた。⇒育児への自信へとつながっていく。
--

援助の経過

年月日	対象者の姿、状況	問題点	援助の方法や経過
h. 1 2	<p>子育て広場へ参加する。 親子のつどいへ参加する。 泣いた時のあやし方やミルクの与え方など、よく質問する。</p>	<p>母親が寝不足で疲れ、目の下にくまができる。</p>	<p>話を聴く 子どもを抱いてあやしたり、わらべうたを歌う。 一時保育</p>
h. 1 3	<p>毎回のように参加する。母子共に他の親子と交流が多く、子どももよく遊ぶ。 活動のプログラム以外でも、自宅同士の交流や公園へ数人で出かける。 おむつ外しや遊び方を相談する。</p> <p>Aちゃんは父親にもよくなつき、父親も育児に協力的である。</p> <p>子どもが何でも自分でしたがる。</p> <p>Aちゃんが1時間しか寝ない日があった。</p>	<p>夜泣きがひどく、ドライブに行く日が続く(父・母交代) 毎日2、3回起きる。 1週間、なかつたり、また夜泣きが始まったりの繰り返し。</p> <p>母:「どうしたら子どもに気持ちが伝わるのだろう」「もう少しゆったりと遊んで欲しい。動きが激しい」「ゆっくり主人と寝たい。2人目も欲しいのに」 母:「そんなに何でもしたいんなら、夜も1人で寝てよ。夫婦間までおかしくなりそう」</p>	<p>話や行動から、母親はAちゃんと家で1対1で過ごすことが苦手で、何をしていたらいいかわからない様子が伺える。</p> <p>母親の傍でAちゃんに声をかけながら遊ぶ。(具体的な接し方の情報)</p> <p>話を聴き、一緒に考える。(母はアドバイスをすると、すぐに、その通りに実行して、うまくいかないと、余計に疲れるようである)</p> <p>↓</p> <p>出来るだけ、母親本人が意向・気持ちの整理が出来るように話を聴く。</p>
h. 14	<p>毎回 活動に参加する。 子どもも母親も、いきいきと過ごす。 母親が日常のいろんな気持ちを話す。 子どもも母親もよく遊び、特定の仲良しグループができる。</p> <p>夫婦で話し合いをして夜泣きの対策を決意する。</p>	<p>母:「はやく幼稚園に行く年にならんかな。朝が来ると、また今日1日が始まってしまふ!と感じ、1日どうやって、2人の時間をつぶそうか、こなしている毎日」</p> <p>またAちゃんが1時間しか寝ない日がある。</p> <p>泣き声に断念して1回ドライブに行く。</p>	<p>話を一緒に聴き、夜泣きの話から日常の子どもとの関わりも振り返る。Aちゃんのかわいいと思うところや、おもしろいエピソードで盛り上がる。</p> <p>話を聴く。 子どもの睡眠について一緒に考え話す。</p> <p>他の母親達も、スタッフも話しを聞き、応援の言葉をかける。 (Aちゃんを信じよう) (せっかくの決意をもう少し続けよう)</p>

援助の経過

年月日	対象者の姿、状況	問題点	援助の方法や経過
<p>6月</p> <p>10月</p> <p>11月</p>	<p>夜泣き卒業の報告をする。</p> <p>母：「子どもって皆それぞれに本当におもしろいですね。イライラする事もあるけれど、自分が睡眠をとってる分、同じ事を子どもがしても笑える」</p> <p>母親がケーキを焼いてくる。ケーキを焼く余裕が出来た事を報告に来る。 母：「夜泣きに困ったら、私に聞いてくださいね」</p>	<p>母親の目のくまがなくなる。</p>	<p>活動の場で皆で拍手をして喜ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夜泣き卒業記念写真撮影 ・原稿の依頼 ・通信に原稿をのせ発行 <p>(原稿内容) これまでの子育てを振り返り、夜泣きに対して、どう接してきたか。</p> <p>アドバイスを元に自分で合うものを選んで実行したこと。</p> <p>家族で乗り越えて絆が深まったこと。</p> <p>「きっと いつかはできるよ、大丈夫」と子どもを信じてあげられる人間でありたいこと。</p> <p>今までを一緒に振り返る。</p>
<p>主に行った支援内容や方法</p>		<p>その後の経過、今後の課題など</p>	
<p>話を聴く。 夜泣きから、日常の生活への気付きを促す。 具体的な遊び方を伝える。 母親自身が問題解決をするサポート。</p>		<p>活動に毎回のように参加し、他の母親の相談にもものる。よく「長くは続かないよ。必ず 終わりが来るから」の一言を言ってくれる。育児日記を持ってきて、自分の子育ての陰には、いつも支援センターがあったことを語る。子どもの成長について、ゆっくり話をした。他の困っている母親や、悩んでいる母親と話をする時、Bさんと呼んで一緒に話を聴いたりする。</p>	